翻訳の翻訳から翻訳のフラット化へ

――ユルゲン・シュタルフ、クリストフ・ペーターマン、マティアス・ヴィッティヒ編『書誌・ドイツ語に翻訳された近代日本文学：1868―2008年』

坪井 秀人

近代日本文学がその内実として西欧近代文学の翻訳から出立したことは、あらためてここに言うまでもない。異なる二つの言語があるから翻訳という行為が成り立つのではなく、翻訳という行為を通してはじめて異なる言語の領域が認識される――翻訳という営みの過程を通して翻訳される二つの（あるいはそれ以上の複数の）異なる言語や文化の領域が認識されるようになるという、翻訳の原理的なメカニズムについては、酒井直樹の卓抜な翻訳論（『日本思想という問題　翻訳と主体』1997）が解き明かした通りだが、〈翻訳文学〉という起源を内在的宿命として逃れることのできない〈近代日本文学〉もまた翻訳を通してはじめて浮上してきた領域であった。

いみじくも酒井が指摘していたように、翻訳する／される対の言語の主客の関係においては、ある決定的な階層が所与のものとして存在するかのように構築される。翻訳という営為は同じ水位を平行移動するのではなく、落差を必要とする。ここでの落差とは言い換えれば、進化論を基調とする近代の時空に布置された文化的格差のことに他ならない。例えばドイツ語で書かれた文学テクストを日本語に翻訳する際、対応しうる言語空間を持たなかった日本語〈文学〉は、ドイツ語文学との間の差異や階層の不均衡の力学、その亀裂の上に自らを同定する（酒井に倣っていえば対-形象化する）ほかなかったのである。

このような翻訳をめぐる権力関係を前提に考えれば、オリエンタリズムの盛行のもとで20世紀初頭から活発化した、非西欧地域の古典の西欧語への翻訳のことも、西欧語の非西欧語に対する覇権の行使を転倒させたものではなく、むしろ西欧語・西欧文化の圧倒的な覇権と支配を象徴するものに他ならない。1980年代以降の西欧における日本文学研究はいうなれば、以上のような起源を持つ西欧語／日本語の間に横たわる翻訳の権力関係をどのように克服していくか、あるいは再構築していくかという、二つの力がせめぎあう過程を歩んだと考えることが出来る。

西欧語文学を翻訳して成立した近代日本（語）文学とその末裔たちをふたたび西欧語に翻訳すること。翻訳を翻訳すること。この行為はまさにその倒錯性と批評的な尖端性において、きわめて豊饒な可能性をも宿すだろう。そしてそこでは自ずと翻訳者の言語や文化の差異に対する政治的なセンスが問われることになる。

2009年にIUDICIUM社（ミュンヘン）から刊行された『書誌・ドイツ語に翻訳された近代日本文学：1868―2008年』は、今回の編者の一人ユルゲン・シュタルフも加わって作られた1995年初版の増補改訂版である。表紙と裏表紙を見ると様々な近代日本文学作品の翻訳書のカヴァーの写真が掲載されている。表紙を例に取ると、谷崎純一郎『瘋癲老人日記』『猫と庄造と二人の女』、森鷗外『舞姫』、大江健三郎『さようなら、私の本よ!』、吉本ばなな『キッチン』、永井荷風『墨東綺譚』（Romanze Östlich des Sumidagawa）、安部公房『箱男』、芥川龍之介『舞踏会（ほか短篇集）』（Chrysanthemen-Ball）、池澤夏樹『マシアス・ギリの失脚』、夏目漱石『吾輩は猫である』のドイツ語訳のカヴァーが並んでいる。いわゆる文豪クラスだけでなく比較的新しい世代の現代作家の作品もバランスよくドイツ語に翻訳され、それが書店に並んでいくという、ドイツ語圏の日本文学の活発な翻訳状況が垣間見られる。

本書に登録されているのは412名の作者、1553種類の作品タイトル、1800点に及ぶ翻訳、544名の翻訳者

であり、よくぞここまで集めにも集めたり、まさに壮観と呼ぶほかはない。アルファベット順に作者ごとにどのような作品がいつ、誰によって翻訳され、どのような形で刊行されたかが詳細に記載されている。巻末には、原作の刊行年、翻訳の刊行年、翻訳の出典、作品名（日本語／ドイツ語）の索引が付されており、例えばある年代に翻訳点数がどれだけ刊行されたかも、これを見れば一目瞭然。重宝することこの上ない索引である。

もちろん、こうした日本文学の翻訳のビブリオグラフィーはドイツ語のものも含めて本書が初めてではない。けれども、これほど豊かな日本文学の翻訳の蓄積がドイツ語の言語文化の伝統に根づいているという事実は、文字通り世界の覇権言語である英語や近隣アジアの中国語・韓国語における翻訳の動向とは根本的に違う、日本とドイツの歴史の特殊性、近代の時間と空間の中で宿命的にと呼びたくなるほどの論理的必然性をもって交差していく両者の関係性のことを考えさせるのに十分であり、本書はそうした大切なことがらを単に統計的な数の力学だけではない、質的な問題として捉えることに読者を促す貴重な問いかけを内包しているのである。

この書誌が1995年に刊行された、1868年から1994年までの期間を対象とする初版の増訂版であることの意味についても記しておこう。この14年の間に、ドイツ語圏の近代日本文学の翻訳状況において、どのような新しい潮流が現れたのか。そのことが増訂版の序言と初版の序言を比較することを通して見えてくるのである。増訂版の序言の記述に従えば、まず何よりも翻訳点数の増加が挙げられる。初版には1032の作品と1200の翻訳が登録されているので、この14年の期間に一挙に50パーセント分にあたる翻訳の追加が行われたことになる。

2点目の大きな変化は、翻訳された作品の作者の傾向についてである。まず、1995年の初版に登録された作品の作者（計300名）のうち上位10名を見てみよう。

川端康成	59
芥川龍之介	55
星 新一	48
三島由紀夫	32
志賀直哉	31
森 鷗外	27
井上 靖	26
太宰 治	25
宮澤賢治	23
井伏鱒二	19

これがこのたびの2009年増訂版になると次のようになる。

芥川龍之介	109
川端康成	82
村上春樹	61
井上 靖	58
星 新一	48
森 鷗外	42
三島由紀夫	38
志賀直哉	31
太宰 治	28
大江健三郎	25

このようなランキングの記載は一見すると通俗的で（まるで世界中で行われている大学の格付けみたいで）学術的ではないというような異論が起こるかもしれないが、初版でも増訂版でも、これら上位の作家の作品に翻訳が集中するという、割合はっきりとした傾向が見出せるので、無視することは出来ないのだ。増訂版について言うと、実に1553篇の翻訳の3分の1に当たる部分を上記の10名の作者の作品が独占しているとのことである。このことは上述したことと矛盾することにもなるが、翻訳点数の総量の増加は、必ずしも近代日本文学の多様性を伝え拡げることにはなっていないということを意味している。

もちろん、こうした傾向は何もドイツ語圏に限ったことではない。例えば韓国においては、隣国であるという理由ばかりでなく（日本における韓国朝鮮文学の翻訳出版点数との驚くべき不均衡を想起しよう）、文学においては強力な〈日流〉の潮流をなお維持しているが、ソウルで最大の在庫を誇る書店、教保文庫の〈日本文学〉のコーナーに赴けば、村上春樹の棚が独立して別に設えられていることを見ることになるだろう（因みに教保文庫では、〈韓国文学〉以外の文学書を〈世界文学〉というカテゴリーで括っているが、〈日本文学〉はそのカテゴリー

とは別枠、つまり韓国文学と対等の扱いを受けている)。

実は韓国における異様なまでの村上春樹の翻訳の集中化(および同期化)は、ドイツ語圏においても例外ではないようで、上記の増訂版の上位10位の中に新たに登場したばかりか、芥川・川端に次ぐ第3位にいきなり躍り出ていることが注目される(初版では6点の登録)。村上春樹作品のドイツ語書籍市場への参入を裏づけるこのことは、1994年にノーベル文学賞を受賞した大江健三郎が上位に加わったこととともに、特筆すべき出来事であろう。しかし、ヨーロッパでは三島あるいは遠藤周作などとともに戦後文学の代名詞的存在としてキャリアの長い大江の場合は初版の時点ですでに13点登録されていたことを考えると、6点から61点と、10倍に翻訳を増やしたハルキ・ムラカミの跳躍の大きさが実感できるだろう。

村上以外では、よしもと(吉本)ばななや、安部公房、谷崎潤一郎、遠藤周作などがドイツ語圏での代表的な長篇作家の列に加わったことを重んじて、増訂版序言で編者のユルゲン・シュタルフは、村上・大江とこれらの作家たちに川端・三島や井上靖の名前を加えることで《日本文学を世に知らしめる作家》の名簿が出来上がると考えているようだ。村上やよしもとらのヨーロッパでの絶大な人気を念頭に、このことをさらに掘り下げれば、この書誌の初版から増訂版への移行過程で生起していたのは、日本文学の世界文学化あるいはグローバル化とも捉えられることであり、同時にそれはかつての西欧(語)文学/日本(語)文学の権力的な構造が揺らぎ始めていることをも告知しているように思われる。川端や谷崎・三島ならいざ知らず、村上やよしもとをオリエンタリズムの作家と見なす視線はいまや西欧世界には皆無であろう。ただ、問題とすべきなのは、こうしたいわば近代日本文学のフラット化が、黄昏れてゆく書籍文化の夕映えの中で進行したということである。こうしたことを考えるきっかけも、このドイツ語翻訳の書誌は与えてくれるのである。

Jürgen Stalph, Christoph Petermann, Matthias Wittig,
Moderne japanische Literatur in deutscher Übersetzung: Eine Bibliographie der Jahre 1868–2008
IUDICIUM Verlag GmbH München 2009
ISBN: 978-3-89129-9